

vol.9
Think!
企業スポーツ

日本でのスポーツ普及において
企業の果たす役割は大きい

バレーボール 東レアローズ

聞き手／武藤泰明

連載第9回はバレーボールチーム「東レアローズ」の男子・女子の監督それぞれに話を聞いた。

武藤 女子と男子ではどういった違いがありますか。

菅野(女子監督) 女子は高校卒業後に入社する選手がほとんどです。職場は事務部に所属していますが、フルタイムで練習しています。バレーボール教室や各工場の夏祭りなどを通じて、いろいろな人と交流を図るよう努めています。

小林(男子監督) 男子は5〜8月のオフシーズンを利用して、配属されている三島工場の各現場で午前中のみ業務を行います。そこで他の従業員との交流を図ったり、仕事について理解を深めたりしています。

武藤 セカンドキャリアについては？

菅野 女子は引退後、約3分の1が社員として残ります。退職したとしても社内結婚のケースもあり、多くがチームの近くにいます。今でもOGとして体育館に子供と遊びに来たり、指導しに来たりしています。

小林 男子は8〜9割が社員として残ります。バレーボールしかしてこなかったような選手が、社業に専念するわけですから、不安もあります。それを少しでも軽減するために、パソコン教

室、英語教室などセカンドキャリアのサポートをしています。

武藤 地域の学校との交流は？

菅野 女子は小学3〜6年生が対象のジュニアチームを作りました。「エンジェルズ」という名前で、バレー部出身の夫婦がボランティアで指導しています。今後はOG、OBによるジュニアチームの指導体系や、バレー育成システムのようなものを作っていければと考えています。

小林 男子は中学生クラブチームを作りOBを派遣して練習をしています。また、小学校では体育の一日先生をしたり、高校生には合宿所として場所を提供したり、大学生とは練習ゲームをして実戦を強化するなどしています。近隣の高校大学だけでなく全国から受け入れています。
武藤 Vリーグのプロ化への動きなどを含め、今後は何が求められると思いますか。

菅野 女子バレーに関しては小学生ではクラブチーム、中・高では学校のチームが中心となっており、それらが日本の女子バレーを支えていることは間違いありません。また、それがあからこそ世界で上位争いができています。プロ化の話もありますが、こういった背景を大事にしながらかのステップに行く必要があると思っています。

小林 企業スポーツという日本

独自のシステムについて、海外の人は、競技に専念できてキャリアを終えた後も自分の身が保証される素晴らしいものと捉えています。同時に、素晴らしいシステムがあるのに強くなるなことを疑問に感じるようです。プロ化は強化につながると思います。今、今でももう少し力を尽くしてもよいと思います。それには、我々スタッフや選手が自分たちの置かれている状況がいかに素晴らしいかを認識しなければいけません。

武藤 企業スポーツが衰退したという人もいますが、企業に所属しているオリンピックアンの割合は1964年に比べ今の方が高いんです。この国において、一定の世界観でスポーツを続けている会社があるおかげで、特にお金がかかる団体競技なども、うまくいっている数字が語ってくれている気がします。ありがとうございます。

Point of View

日本独自の人事制度の上に成り立つ

日本の大企業の人事制度の特徴は、長期雇用と人材育成である。企業スポーツはこの独自のインフラの上に成り立っている。他の国にはこのような人事制度がないので、企業スポーツが成立しにくい。

選手の現役の期間は長くないが、この制度のおかげで、選手は自分の人生について、かなり長期にわたって、安定した将来を予想することができる(もちろん、人一倍の努力が必要なのは、競技も引退後の職務も同じであるが)。他国の競技者から羨ましがられるはずである。

武藤泰明(むとう・やすあき)
早稲田大学スポーツ科学学術院教授。東京大学、向大学院(修士)卒。三菱総合研究所主席研究員を経て現職。専門はマネジメント。

イラスト=太田丈晴



右 小林 敏さん(こはやし・あつし)男子バレーボール部監督。

左 菅野幸一郎さん(かんの・こういちろう)女子バレーボール部監督。